

# 思考力などの見えにくい力を 適正に評価し指導改善に生かす

東京大大学院教育学研究科教授 秋田喜代美

「生きる力」を育てるには、思考力や判断力、表現力などの育成が欠かせない。しかし、これらの力は見取りが難しく、評価の仕方に困っているという声も聞かれる。そこで、東京大大学院の秋田喜代美教授に、これからの生徒に育てたい力と共に、そのために必要な評価の視点についてうかがった。

## 中学校の役割として 生徒に育みたい4つの力

新課程の全面实施は、生徒に育てたい力を改めて考える良い機会と言えるでしょう。学校全体で考えたことを共有し、指導や評価に生かしていくことで教育の充実が図れます。中学校教育の基本的な役割は、教養を持って社会に参画する市民を育てること、そして豊かな人生を過ごすためのベースとなる力を身に付けることだと、私は考えています。そのため、中学校で生徒たちに付けたい力を4つ挙げたいと思います。

1つめは、「他者と共に生きる力」です。他者と共に学び合って生きていくことは、社会生活を営む上で必須の素養と言えるでしょう。2つめに、「学び方を学ぶ力」が挙げられます。中学生の時期から、先達が積み上げてきた知識や道具などを使って自分を高める力を、是非とも育てたいです。3つめに「情報を正しく選択して活用する力」も、情報が溢れる社会を生きていく上では不可欠でしょう。そして、中学生は自分の可能性を知り、適性や興味に気付いていく時期ですから、4つめとして「自分のあり方を学ぶ力」を育てることに注力してください。

## 評価規準を活用しつつ 教師が主観的に見取る

これら4つの力は、基本的に授業を中心とした学校生活を通して身に付けるものだと思います。例えば、国語で文学の楽しみ方を理解したり、体育で運動技術を学んだりすることが人生を充実させるように、本来、どの教科も生徒自身や生徒の生活と深い接点があります。しかし、高校受験だけを意識した指導が主体になると、授業の学びが生徒自身と切り離されてしまい、勉強が「つまらない」と感じられてしまいます。その結果、生徒は学びに向かわなくなり、力も身に付いていきません。生徒の生活と学校の学びや、他者のつながりを持った授業をつくることで、生徒は授業に充実感を感じます。このような授業を通して4つの力を身に付けること。それが、中学校教育の役割だと、私は考えます。

4つの力は新課程では「生きる力」として表現され、中でも思考力、判断力、表現力の育成は重視されています。これらの力は定期考査で測ることが難しいのが現状です。しかし、子どもの力を育むためには、これらの力が子どもにどの程度身に付いているかを適正に評価し、指導を改善することが不可欠です。では、思考力、判断力、表現力を評価するためには、何が必要なのでしょう。前提となるのは、教科や単元ごとに「どの

# 「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む



あきた・きよみ◎東京大大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。専門は教育心理学、授業研究。立教大文学部助教授などを経て現職。主な著書は『授業の研究 教師の学習』（共著、明石書店）、『授業研究と学習過程』（共著、放送大学教育振興会）、『子どもをはぐくむ授業づくり—知の創造へ』（岩波書店）など。

ような力を育てたいか」というねらいを焦点化する事です。おのずと生徒に出す課題は精選されるでしょう。中学校では指導内容が多いですから、授業を効果的、効率的に進めるためにも課題の精選は欠かせません。

そして、生徒が課題に取り組み中で、実際に生徒が何を考え、表現したかを丁寧に見取り、指導改善に生かすことが大事です。ねらいに対する「成果」を確認することも重要ですが、同時に生徒の思考の「過程」に目を向けることが、思考力、判断力、表現力などを育てる上では不可欠と考えてください。教師はそうした視点で授業を振り返り、ねらいを達成するために、どのような説明や問い掛け、

また課題の設定がより効果的であったかなどを考えることで、次の指導を充実できます。

生徒の思考力などを評価するために、教科を超えて統一した評価規準を作成している学校もあるでしょう。そうした評価規準は、「言語力のこの部分を大事にしよう」「論理的に説明する力を育てたい」など、学校全体の指導の方向性を明確にして共有する上では有効です。その半面、全てをチェックシートの項目に沿って評価するなど、客観性が過度に重視されると、教師個々の専門的な判断が働かなくなり、一面的な評価となる恐れがあります。評価規準は一つの道具として活用しながら、授業中の生徒の言動や生徒同士のかかわ

り合いなどを、教師が専門家の見識に基づいて主観的に見取り、生徒一人ひとりへの支援を考える必要があるでしょう。

## 指導と評価の一体化を 実現させる3つの視点

では、思考力などを見取り、評価するための具体的な視点について説明したいと思います。

### ①生徒同士のかかわりを通して、思考している内容を表現させる

生徒1人で学んでいる時は、思考力、判断力、表現力などがどのように働いているかは見えません。ペアや小グループで、学級全体で話し合わせると、違いやズレが表れ、自然と思考や判断の根拠や理由を語り始めます。

例えば、ある授業で「元寇の時、元は混成軍だから負けた」という説明を理解しきれない生徒がいました。そのまま次の学習に進んでいたなら、生徒の確かな理解と定着は得られなかったでしょう。しかし、授業では生徒同士の話し合いがありました。すると、生徒の目線から「史料を見ると元軍は服装がまちまちだ」「中国は大きな国だから言葉や食文化も違って1つにまとまらなかったのだろう」「逆に日本は一致団結して必死に戦った」といった考えが出て、その生徒は納得した様子でした。教師の説明を一生懸命にノートに書いて分かったつもりでも、納得できていないことはよくあります。そうした時、生徒同

\*プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

士が自分たちの言葉で話し合うことで「腑に落ちる」ことは、どの教科でもあるのです。

生徒同士が自分の言葉で説明し合う状況を意図的につくり出すことで、教師は個々の生徒の思考力などを評価できます。逆に、教師が一方的に話す指導では、評価は定期考査に頼らざるを得ず、しかも評価の対象は知識が中心となります。

学んだことを文章で振り返らせるのも良い方法です。これは、話し合いを通して自分の考えがどのように変化したのかを生徒自身が実感でき、「次はこんなことを学びたい」といった気持ちが芽生え、次の学習への意欲と具体的な知識のつながりを生む利点もあります。特に、中等教育では子どもに成長している実感を持たせることが大切な時期です。こうした振り返りの学習を重視するとよいでしょう。

②生徒の自己評価や相互評価を取り入れる

知識を測る定期考査とは違い、思考力などの評価を教師1人で行うのは、生徒の人数を考えても難しいですし、主観に偏るといふ問題もあります。そこで、生徒の自己評価や相互評価を取り入れてみてはどうでしょう。

先生方は自分なりの観点で生徒を見取っているとありますが、「自分はここを頑張った」などと生徒に自己評価をしてもらうことで、見えていなかった点に気付かされることもあります(図)。

自己評価・相互評価を取り入れた評価表

国語研究録評価表 平成24年 月 日					
国研のタイトル ( 年 組 番号前 )					
【国語研究録の振り返り】					
	満足できる (A)	少し努力を要する (B)	まだまだ努力を要する (C)	自分	他人 ( )
テーマ	対象または方法が、国語の学習でこれまで学んできたことに深くつながっている。	国語の学習で学んできたことは少し関係があるが、深いつながりとは言えない。	本人にとっては大切なこともかもしれないが、国語の学習で学んできたこととは関係がない。		
紹介	多くの文献に当たっていて、その内容について読者に知識がなくても理解できるように書いている。	書かれたことに間違いはないが、内容が難解で、知識がなければ理解できない。または、少ない文献にしか当たっていない。	書かれたことはつじつぎがあっただけで、価値やそそぐにない記述である。または、全く文献に当たっていない。		
調査	独自の調査が行われ、調査方法や調査結果がきちんと書かれている。	独自の調査が行われているが、調査方法や調査結果がきちんと書かれていない。	独自の調査が行われていない。(本やHPに書いてあることを写すのは調査ではない。)		
考察	テーマについて、自分の考えが論理的に筋立てて述べられている。	テーマについて、自分の考えが述べられているが、根拠が薄く、思いつきに近しい。	テーマについて、他人の考えが紹介されているが、自分の考えが述べられていない。		
表現	文章が分かりやすく、レイアウトも読みやすく工夫されている。	文章あるいはレイアウトに問題があり、少し読みづらい。	文章が読みにくく、レイアウトも雑で、大変読みづらい。		
総合評価	1項目につき、A:20点、B:10点、C:0点で換算し、1年40点以上、2年60点以上、3年80点以上なら…A 1年30点以上、2年50点以上、3年70点以上なら…B				

文章による振り返り (2年生は昨年、3年生は過去2年間の振り返りも書く。)

**【国語研究録の取り組みやプロセスでの振り返り】**

1. テーマ設定について  
 (「テーマをどのように決めたか。」「なぜ、そのテーマにしたか。」「調査が進むにつれて、どのようにテーマが変わったか。」「そのテーマでよかったか。」「3・2年間国語研究録に取り組んできて、テーマにつながりはあったか。」等)

2. 調査について  
 (「参考文献や資料はどのように見つけたか。」「見つけられなかった、あるとよかった参考文献や資料はないか。」「調査はどのように進めたか。」「アンケートをとるとき工夫した点はないか。」「考察するときに調査を活かすことができたか。」「工夫した点や苦労した点はないか。」等)

3. 表現について  
 (「レポートにまとめる上で、苦労した点・工夫した点はないか。」「文章で表現する上で、苦労した点・工夫した点はないか。」「読み手を意識して書けたか。」等)

4. 評価について  
 (「クラスメートのレポートを読み、視点を持って評価できたか。」「自分や仲間のレポートの良い点や改善点に気づけたか。」「よい点や改善点をアドバイスできたか。」「各々のレポートから内容的に、表現的に、学び合うことができたか。」「国語研究録をみんなで読み合い、学び合いを活かした後輩たちへの『国語研究録紹介資料』を作成できたか。」等)

5. その他  
 (「参考にした先輩のレポートは何か。また、なぜ参考にしたのか。」「参考になった授業は何か。」「昨年の国語研究録振り返りや、先輩からの『国語研究録紹介資料』を活かすことはできたか。」「見直しを持って取り組めたか。」「研究の途中や振り返りの時に、参考になった意見はないか。」「印象に残っている友だちの言葉やそこから気づいたことはないか。」等)

【調査】国語研究録を1年で1テーマ3年間で3回作成することについてどう思うか。  
 また、国語研究録をクラスで1冊にまとめること、図書室に保管することについてどう思うか。

福井大教育地域科学部附属中学校国語科では、「国語研究録評価表」の左ページにある「国語研究録の振り返り」や話し合いによって生徒が自己評価・相互評価を行った後、更にさまざまな観点から自分の学びを「国語研究録評価表」の右ページにある「国語研究録の取り組みやプロセスでの振り返り」で詳細に振り返る。また、福井県では「福井県中学校教育研究会 特別活動部会」が、福井県内の中学校に「自分でつける通知表」を提案している。必要に応じて、各校が自校用にアレンジし、生徒が自己評価を行うこともある  
 \*秋田先生提供の資料をそのまま掲載

## 「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

同様に、生徒の相互評価を行うと、教師の視野が広がり、知らないところで生徒が助け合っていたり、考えを深め合っていたりしていることが分かり、更に生徒同士の認め合いの関係を育むことも出来ます。相互評価は、いわゆる一斉型の指導では出来ません。生徒が自分たちで考えたり確かめ合ったりする協働型の学習活動を通して、互いの評価が生まれるからです。そういう意味でも、指導と評価は一体となっているのです。

中学生であれば、生徒自身が評価規準をつくることも出来るのではないのでしょうか。例えば、レポートを書く前に、どのようなポイントを押さえるべきかを生徒に発言してもらいます。「相手に伝わりやすく書いている」「自分の言葉で説明している」など、さまざまな観点が出てくるでしょう。それらは、いわゆるメタ認知となり、レポートを書く際に強く意識されるようにもなります。最後に、自分たちのつくった評価規準に沿って振り返りさせれば、更に学習を進展させられます。

### ③ワークシートなどを活用し、指導と評価を効率化

中学校では、基礎的・基本的な知識や技能の定着をおろそかに出来ません。土台となる知識や技能がなければ、思考や表現をすることが出来ないからです。ワークシートやテスト、ドリルなどを有効活用して、効率的に定着させたいところです。

新学習指導要領によって学習内容が増えましたが、これからは、授業の中で効率的に定着させる部分と、深く考えさせる部分のメリハリがより大切になると思います。例えば、ある学校の古文の授業では、文法事項の答え合わせの時、生徒を一人ひとり指名して発言させるのではなく、活用形の正答を生徒が集中して採点できる速度でパソコンから映し出し順に進めて指導されました。そのような指導の効率化に向けて、電子黒板やパソコン、ICT技術などの活用にも力を入れていただきたいと思います。

### 校長に求められるナレッジ&タイムマネジメント

校長先生に意識していただきたいのは、指導と評価の一体化の基盤となるのは授業研究だということです。教師が互いに授業を見せ合い、単に評価規準の観点のみでチェックするのではなく、どのような生徒の姿が見られたか、学習課題はふさわしかったかなどを議論してください。課題は全ての生徒にとって考えさせる題材であったか、分かる生徒にとってはあまり考える必要がない題材ではなかったかなど、特に課題の設定は授業の根幹にかかわる議題となります。

既存の評価規準で生徒の実態を十分に捉えられるかも検討しましょう。評価規準は常に実践と結び付きながら改良を重ねることが大

事です。すなわち、校長先生には学校全体でどのような授業をつくるかというビジョンを持ち、それに応じた学習活動や課題になっているか、そして評価が連動する形になっているかをチェックしていただきたいと思っています。

先生方は極めて多忙ですから、生徒を丁寧に見取るためには学校運営のスリム化も不可欠でしょう。最初にどのような生徒を育てたいかを考え、それとかわりない行事は精選するという決断が必要かもしれません。そういう意味では、校長先生には、先生方に対するナレッジマネジメントと共にタイムマネジメントが求められていると言えるでしょう。

評価規準を最初から細かくつくるのは、手間が掛かります。他校や外部機関が作成した出来のよいものを見本として、自校の実態に合わせてアレンジするなど、外部のリソースも有効に活用していただきたいと思っています。

教師が行う見取りや評価は複雑で、その手段階もさまざまですが、教師が最も手応えを感じるのは、自分が出した課題に生徒が食いついて、生徒同士がつながり、理解や思考が深まっていく実感を得られた時でしょう。そうした主観的な判断に、教師の専門的な見取りがあると思います。だからこそ、校長先生を中心に、付けた力が本当に身に付いたかどうかを十分に検討しながら、思考力などを含めた「生きる力」を育む授業をつくり上げていただきたいと思っています。